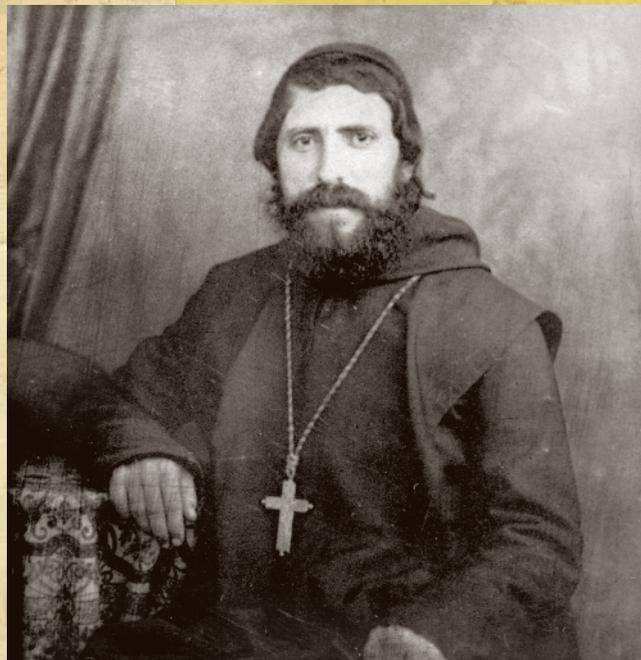


ニューノーシアの設立まで

ニューノーシアの設立は、歴史上のある偶然の出来事が発端となりました。それは1835年、聖職者の権力に反対してスペイン政府がすべての僧院を閉鎖し、財産を没収したことでした。ガリシアの有名なサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂の隣りにベネディクト会のサン・マルティン・ピナリオ僧院がありました。そこで少し前、二人の若者がこの僧院で従順な修道生活を一生過ごすよう祈願を立てたのです。1835年、その二人のうち年上のドム・ジョセフ・セラは修道生活を続けるため、まもなくイタリアのサレルノ近郊にある名高いカヴァ・デイ・テイレニ大寺院に移りました(訳者注:ドムは聖職者に対する尊称)。ドム・ロゼンド・サルバドは自分の僧院が再開するのを何年も待っていましたが、結局かなわず、セラを追ってカヴァに行き、そこで1838年に終生祈願を立て、翌年早々に司祭となりました。

宣教の熱意も固く1844年、この二人の修道士はローマ当局に宣教師としてどこへでも派遣されるよう申し出て、パースで最初の司教として就任したジョン・ブレイディー司教のもとに配属されることになりました。1846年1月、ブレイディー司教のもとに遣わされた宣教師の一行がパースに到着しました。そのメンバーは、二人のスペイン人のベネディクト会修道士、イギリス人のベネディクト会副助祭デニス・トゥテル神父、フランス人のベネディクト会修練士ドム・リアンドル・フォンテン、そしてアイルランド人の教理教育者ジョン・ゴーマンでした。三カ所あったアボリジニー宣教団体のうち数カ月以上存続したのはここだけでした。トゥテルは病にかり、宣教グループには同行しませんでした。ゴーマンは同年6月に射撃事故により死亡し、フォンテンはこの事故後、精神錯乱に陥り、宣教を断念してフランスに帰国しました。そういうわけで二人のスペイン人が宣教団体の基礎設立に共同責任を持ち、やがてニューノーシアへと発展していったのです。僧院長に就任したセラが宣教団体の責任者でしたが、1849年にパース司教補に任命されたため、宣教団体から遠ざかりました。セラはその後10年間数々の問題を抱えながらもパースで精力的に活動していましたが、1859年にヨーロッパに帰った後、戻ってはきませんでした。従ってニューノーシアの歴史の最初の時代は通常、次の名で知られています。

ニューノーシア



The Benedictine Community of New Norcia thanks you for visiting.

All purchases made during your day at New Norcia is used by the monks to help preserve this historical and spiritual treasure – Australia's only monastic town.



Pax, a Latin word meaning peace, is the motto of the Benedictine monks of New Norcia. It is the fruit of their regular, prayerful and stable life together and the gift they offer to all who visit their town.



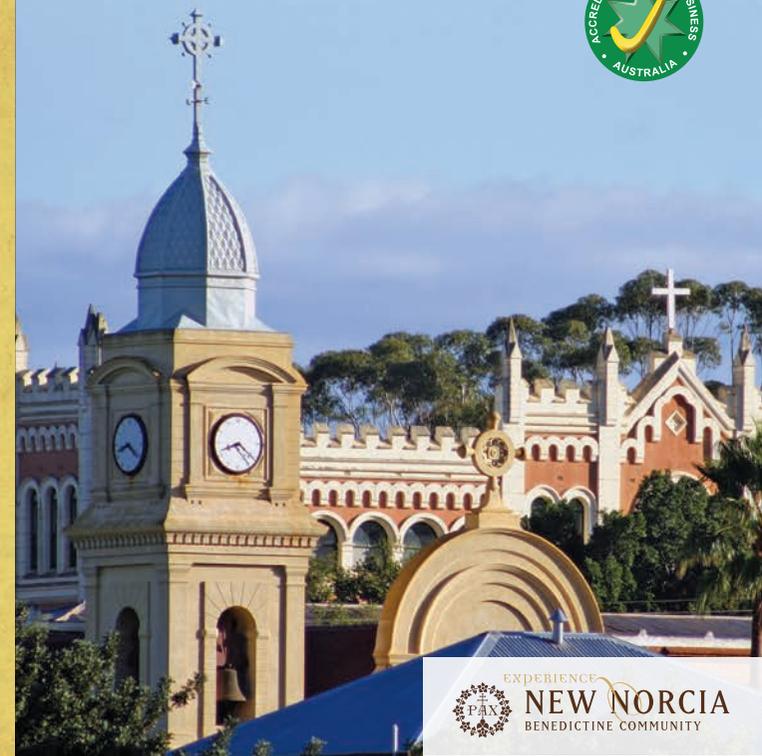
EXPERIENCE
NEW NORCIA
BENEDICTINE COMMUNITY

Great Northern Highway, New Norcia Western Australia 6509
www.newnorcia.wa.edu.au



ニューノーシア 小史

*A brief history of New Norcia
in Japanese*



EXPERIENCE
NEW NORCIA
BENEDICTINE COMMUNITY



サルバド神父の時代(1846年～1900年)

ニューノースアの歴史の最初の50年間は、ロゼンド・サルバド司教(1814～1900)の確固たる存在で占められています。同じくベネディクト会修道士であったドム・ジョセフ・セラと共に1846年に

ニューノースアを設立し、その生涯を費やしてオーストラリア史上でも非常に刷新的で成功した宣教団体を形成したのです。サルバドの当初の目的は、ビクトリア平原の先住民の中にほぼ自給自足のキリスト教農村を作ることでした。しかし1860年代に広まった種々の病気により地元の人口が減ったあとは、州内の方々からニューノースアに連れて来られた先住民の子供達に実践教育を施すことに専念しました。19世紀の他の宣教師達がしたように、サルバドの目的も当時のヨーロッパ理想に沿った「文明化」と宣教でしたが、それを先住民文化に対する思いやりを持って行い、これは当時としては稀なことでした。サルバドは多い時には80名近くを抱える男子修道会を指導しましたが、そのほとんどがスペイン人で修練士でした。サルバドは何度もヨーロッパに足を運んで資金を募っては土地を購入して建物を建て、書籍、祭服、美術品、礼拝用品の他、家畜や農工機材を買いました。

その実践面での成功と独特の人柄によりサルバドは西オーストラリア州の著名人となり、ベネディクト会でも国際的存在となったのでした。サルバドは1900年にローマに行く途中、86歳でその生涯を遂げました。遺体はニューノースアの人々により運び戻され、僧院教会に埋葬されました。

僧院の町(1901年～1950年)

1900年暮れのサルバド没後、ニューノースアは方向転換し、次の50年間は僻地の宣教団体というよりは、むしろ伝統的なヨーロッパ様式の僧院居留地となりました。先住民のための教育や地域社会ケアは続けられましたが、西オーストラリア州の農耕地区住民の教育と信徒のための司牧活動に重点が移されました。また、祈りや知的探求、芸術作品の制作に多くの時間が割かれることになりました。

それは1901年にスペインからやってきたサルバドの後継者フルジェンテアス・トレス司教により始められました。宣教団体が傾いていることを受けて、トレスは開発資金を得るため土地を一部売却しました。1908年にはセント・ガートルード女子校、そして1913年にはセント・イルデフォンサス男子校の校舎を自ら設計し、建設監督にあたり、職員は前者を聖ヨゼフ会から、後者をマリスタ教育修道会から募りました。そして僧院長としての14年間、町中の主要な改善を実施しました。トレスは特に町の建築物の内装に注意を払い、スペイン人木彫士のホアン(ジョン)・カセラスと、修道士で芸術家でもあるレズメス・ロペス神父をニューノースアに迎え入れ、今では当地の豊かな芸術遺産の一部となっている素晴らしい作品の数々を生み出しました。

トレスによるニューノースアの方向付けは、その継承者ドム・アンセルム・カタランの指導により1916年から1950年まで継続されました。カタランは町に現在ホテルとなっているホステルを加え、またニューノースアの才能ある宗教音楽家ドム・ステューベン・モレノの作曲を奨励しました。

1951年以降の変化

第一次・第二次世界大戦があったにもかかわらず、1950年代までにニューノースアは安定した規律ある、しかしどちらかというといつと内省的な宗教活動の拠点となりました。ところがそれから1990年代までに多くの変化を遂げることとなります。変化はまず僧院内で起きました。もっと多くのオーストラリア人修道僧を募るために、僧院生活が地元的环境に適応するよう改善されました。1960年代末の第二バチカン公会議による改革により修道生活と礼拝がさらに簡素化・明確化されましたが、ニューノースアの修道僧の数はそれでも徐々に減ってゆきました。

しかし僧院の壁の外でもっとさまざまな変化が起こっていました。僧院が司祭を派遣していた教区はニューノースア教区だけとなり、1970年代にはアボリジニー人学校も閉鎖され、1991年のニューノースア・カトリック・カレッジの閉鎖により、正規の中等教育に終止符が打たれました。しかしながら1980年代初頭からニューノースアでは観光業が盛んになり、多様化してゆきます。博物館と美術館は毎年何千人もの訪問客を迎え、町のガイドツアーは毎日行なわれています。ホテルの他に、僧院ゲストハウスでは静寂さや心の修養を求める人々に宿舎を提供しています。以前の学校校舎は、今では生徒の練成合宿や成人向け研修会・会議に利用されています。1996年に修道僧達は教育センターを設立し、訪れる学生達のために各種プログラムを提供しています。また、ニューノースアの自給自足の伝統技術であるパン作りとオリーブオイル製造も再開されました。